月時計

月の光を浴びると　くるうよ

コンビニエンスストアーの深夜から早朝までの時間どんなお客が店にくるのか紹介してみよう

こんばんはー

仕事を終えて帰宅途中のホステスが寄って行く

毎回コンビニエンスストアーにとっては高額な買い物をしていってくれるので上客である

5330円です

木崎くん彼女いるんでしょ

残念ながらいないんですよね

大学にはカンナさんのような女の子はいなくて

顔なじみになると親しく話しかけられる

またまたァ大学生のくせにおとなの女に気をひくようなことというとあとがこわいんだから

役得である

夜も明けはじめると新聞配達人や朝市に出かける人が早い朝食を買って行ったりする

老人が朝食の惣菜やパンを買いにくる

こんな年になると食事つくるのも大儀でねえ

顔なじみになると親しく話しかけられる

おにいさんみたいな若い人がいっしょに住んでたらいいんだけど

役得……でもない

ぼくがバイトしてる時間帯の客層はザッとこんなもんである

ところがそれにもうひとり不思議な男が加わったのだ

いらっしゃいませ
ウイーン
は…はい
コーヒーを
この男だ
2週間ほど前から毎晩のようにくる
きたっ!!

たいがいの客は職業に見当がつくのだが いまだに この客だけは わからない

いまどきの長髪じゃ 業界関係か 自由業――しかし この身なりは それらを否定するし

店で買うのが いつもコーヒーだけ というのも 不思議な気がする

それも ああして 外を ながめながら コーヒーを飲んで そして帰るのだ

夜の外を見たって なんにも 見えないと思うけど

月がきれいだ

え?

今夜は 満月だよ

ああ
ほんとうですね

月なんて
気にして
見たことないから

なんだ
外をながめてたのは
月を見てたのか

驚いた

月の美しさにではない
この客が
「コーヒー」以外の
言葉をしゃべったのが
初めてだったからだ

このバイトは
長いのかい？

ぼくですか？
きみのほかにだれかいるかい？
それもそうだな……
春からです今年の
月はかなりのエネルギーを出している特に今夜のような月は有機物の細胞や精神にどれだけ影響をあたえているのか
は？
月の光を浴びていると
くるうよ

ウィーン
くるう？
月の光を浴びていると？
なんだよ～っ
へんな客！
へんな客で悪かったわね
麻梨ちゃん

な…なにしてんだよ こんな時間に！ 2時だぞ 夜中の

2時じゃないわ 2時36分

酔ってるなぁっ!? みんなと お酒飲んでたの

なにが お酒飲んで……

なにか 買うふりしなよ カメラ回ってんだ

声は録音 されないけど

店長が 録画を見たら さぼってるって 怒られるよ

お酒飲んだ ぐらいで 怒ること ないじゃない

わたしだって法の下では飲んでも許される年齢なんですからね

飲むなんていってないよ

時間考えなよ夜中まで遊びまわって

Beef Pie

亮介だってこんな時間に外出してるじゃない

ぼくはバイトだっ

なによー深夜のバイトだからこそおそくなったついでに元気づけに寄ってあげたのにーっ

Gold Home

帰るのがおそくなったんなら寄り道しないでまっすぐ家に帰りなよ

まえから深夜にはあぶないからくるなっていってあるだろ！

ブン
なによ 人の気も 知らないで
つい・・・でなんて 負担になると 思って そういったのに
もう行って やんない
キョロ
キョロ
この館
忍び込むには ちょうどいいや
ズサ

これこれ
これこそ
ついでなのよ
月明かりで
けっこう見えるけど
塀の上からでも
木立ちが多くて
家がよく見えない
なんて すごい
えいっ
どて
いたた
ちょっと お酒
飲み過ぎたかな
バッグ
どこ?
バッグ
バ……

麻梨ちゃんと
変わらない態度で
しゃべることが
できたことに
安堵した

いや
麻梨ちゃんが
そういう態度を
とってくれたから
できたことだった

そう思うと
麻梨ちゃんが
自分より
おとなになったように
思えた

それは
初めて化粧した
麻梨ちゃんを
見たときの
気持ちに似ている

負けたな……

女の子って
突然に
一足飛びに
おとなになるのかな

そういや思い出した麻梨ちゃんのつくったオムレツ！型のくずれたの
あはは

よーし決めたわこんどのお弁当はくずれたオムレツよ覚悟しておきなさい！
決死の覚悟で食うよ

イーッ

バタン

？

だいじょうぶだよ おじさんにも おばさんにも そういっといてよ

麻梨ちゃん

また きていい？

こんどは わたしが お弁当つくって くるわ

え

なによ～っ いまの顔

わたしがつくる お弁当なんか 食べられた もんじゃないって 思ったでしょ いま！

あ… いや そういう……

ぷ

亮介家にもどってきたほうがいいんじゃない？
麻梨ちゃん
わたしのためにいってるんじゃないの！
このあいだいったことはべつにして！

大学行って夜バイトして食事もなにもかも自分でなんて無理よ
いつか身体こわすわ
おとうさんのいうように卒業してからでもいいじゃない

まだ1週間しかたってないよ
ひとり暮らししてる人なんてほとんど外食だよ
社会人でもさ

寝てンのかな
寝てる？
夜型人間なんだ
下宿って
いっても
自炊だしさ
あんまり
顔合わせることなくて
気楽といえば
気楽だけどね

もう起きて
1階におりて
きたかも
しれない
呼んでくるよ

いいわよ
わたし 篠内さんに
会いにきたんじゃ
ないんだから

自炊って
ちゃんと
食べてるの？
夜食は
店のを
食べられるし
朝は店で
パンとか
弁当買って
あとは
外食とか
いろいろ

麻梨ちゃん
亮介！
よかった帰ってたのね
これおかあさんから
夕飯まだでしょ
炊き込みごはんと煮物よ
煮物？ひさしぶりだまだ暖かいや
すっ
あ…あがんなよ
いいの？
篠内さんは？

館には行ってないはずだよ

じゃあほかの男たちと遊びに行ってたんだ

ぼくたちを敬遠して！

館には一回しか行ってないわ

ほかの男の人たちとデートしたのだって亮介の注意をひきたかったからよ

麻梨ちゃんがあのときいったことが夢の中の出来事のような気がする

だって気づきもしなかったあまりにも身近にいすぎて……

家を出てから顔を合わせてないな大学でも……

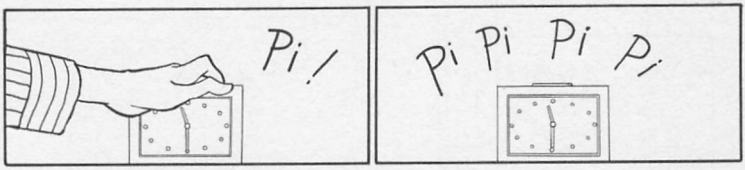
ぼくが
下宿する
ようになっても
彼は
真夜中に
店にやってくる

仕方ないよな
こんな時間
レストランも
喫茶店も
あいてないし
スカイラークとか
ロイヤルホスト
ぜったい
あいてるな
ドカ
バカ
木崎ーっ
いったい
どうなってん
だよォ

?
麻梨さんだよ
麻梨さん！
ちっとも
ぼくたちと
飲みに行ったり
してくれないんだ
忙しいとか
なんとか
いいわけしてさ
ほんとに館に
入りびたって
ないんだろうな!?

いつも夜中起きてるんですか？
眠れないんだ
だから日中寝ている
学生のころは人並の時間帯だったんだけどね
もう何年も昼夜逆転してるな
月は欠けまた満ち始めていた
眠れなくてひとりの長い夜を彼はどんなふうに過ごしているのだろう
さっきのように暗がりに潜んで月をながめているのだろうか

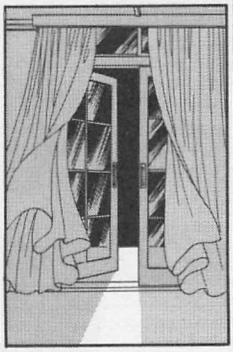
うわっ
ドン
呼んだか？
ミシッ
いえ…あのベランダがあいてて
びっくりした…
篠内さんが部屋にいないんならぶっそうだから
ふ…
入ってくる者はいないよ
カチ
あの高い塀と門を見りゃ
いかに外界からの遮断を目的としてるかわかるだろう
もっとも麻梨はものともせず入ってきたが


Pi!

Pi Pi Pi Pi

ギッ
ギイッ

篠内さん



いないんですか？

ぼくが
麻梨ちゃんへの
自分の気持ちに
気づくのは
この館での
戦慄するような出来事に
よってだった

行ってらっしゃい
お帰り
お帰りなさい
あら麻梨は？
え？
まだ帰ってないんですか!?
亮くんといっしょじゃなかったの？
亮くんのバイトにつきあっていっしょに帰るからってゆうべ電話してきたのよ

あ…あ…
そうです
そうなんだけど

寄るとこ
あるからって
さっき
先に店を出たから
てっきり もう
家に帰ってると
思って……

あれっきり
もどってないって
どこに行ってるんだ

なにしてるん
でしょうね
あの子は

亮くん 先に
ごはん
すませなさい

まさか 酔いつぶれてる
なんて……

RRRR

矢野です

木崎亮介
くん？

はい
ぼくです

篠内だが
いますぐ
12丁目の家まで
これるかな？

とらわれの姫は
矢野麻梨さんだよ

「こーんな
大きな敷地に
いったい
どんな人たちが
住んでるのかしらねえ

木が うっそうと
繁って
どんなお家なのか
見えやしないし

ねえ こんと
こっそり
入ってみようか？」

「なにいってんだよ
不法侵入で
つかまるぞ」

あの長い塀に
沿って歩くたび
そういってた

でも
夜中だったら
こんなに
広いんだもの
見つかりっこ
ないわ

だから
いわんこっちゃ
ない!!

ようこそ
木崎亮介くん
あっ
どうぞ
麻梨さんはまだ眠ってるよ
コーヒーの客!!
眠ってる…って…!
塀越しの珍客と明けがたまでごらんのありさまだ
話してるうちに麻梨さんは眠ってしまって外泊する結果になったわけさ
きみが心配するようなことはなかったよ
すばらしい月夜だったけどね

ふふ
あはは
妙なかんじだな
きみと太陽の下で顔をあわすのは
きみは小学生のとき親を亡くして親の友人である矢野家にひきとられて育ったそうだね
麻梨ちゃんがしゃべったんですかーっ？
中学 高校とつきあってた女の子がいたけどいまは決まった彼女がいないとも
麻梨ちゃんが迷惑かけました
連れて帰ります部屋はどこですか!?

亮介？
なんでここに!?
麻梨ちゃん
あんなにまっすぐ帰れっていったのに
ぼくが呼んだんだ
篠内さん
ひとりで朝帰りはまずいと思って
わたしったらすっかり迷惑かけて
わたし酔って失礼なことしなかったかしら？
いいえとても楽しい夜でしたよ
わたしも……
無断で侵入したことじたい失礼なんだよ
おばさんにウソの電話いれたりして
亮介が追い返したりしなければウソにならなかったわよ

だからって他人の家に忍び込んでいいのか？

そうだわ塀なんかじゃなく玄関から訪問すればよかったんだわ

篠内さんみたいな人が住んでるってわかっていれば

こんどからそうしなさい

こんど…って

いつでも遊びにおいで麻梨さんのために開けておこう

きゃーっ！

遊びにきてもいいの!?

亮介聞いた!?

この家にぜひいらっしゃいって絶対いらっしゃいって

そういうふうにはいってないよ

亮介くんもね

なにすんだよ
いてえ
おまえら
それでも
麻梨の恋人
立候補者か
夜中まで
飲みに歩いたうえ
家に送りも
しないで

そりゃ
きのうは
ちょっと
飲みすぎたけど
家まで
送ったぞ
いったん
家に帰って
それから
ぼくの
バイト先に
わざわざ
きたってのか
おまえたちの
おかげで
他人の館に
忍び込むわ
まったくもう…

ちょっと待てよ
木崎

ホントは
麻梨さんを
好きなんじゃ
ないのか？
麻梨さんの
ことになると
なんでも
ムキになって
なに～～～っ？
そういえば
GFはいるくせに
いまだに ただひとりに
決めないってのも
おかしいよな

ああ 好きだよ
兄妹のように
いっしょに
育ったんだから
兄貴として
妹の心配をするのは
当然じゃないか
特に
おまえたちのような
遊び人たちはな

そうよ
亮介のは
兄妹愛

麻梨さん！

亮介に
恋人がいないのは
深夜のバイトに
そなえて
みんながデート
してる時間は
熟睡してる
からよ

麻梨さん
きょう
どこへ
行こう

また
全員で？
それとも
クジを
ひいて？

きょうは
ダメ

お館に
招待されてるの

だれの館だって!?
なに科？
なに学部の？

りっぱな
おとなよ

おちついていて
ムードがあって
やさしいの

じゃーねー

麻梨さん！

待ってよー！

麻梨ちゃんは変わった

わたし まり

これからよろしくね

純真で世話やきでおじゃまでなまいきさもほどほどのあどけなさが残る女の子だった

少なくとも高校生までは

それがいまはどうだ軽く男をあしらい恋の駆け引きなどもみごとにこなす

いまやぼくは父親よろしく保護者気分だ

それでねぇ部屋数が12もあるのよ

昔は公爵の家だったんですって

こんな広い館にたったひとりで住んでるなんて

あいてる部屋がもったいないわっていったら

それじゃ麻梨さんに部屋を貸しましょうかですって

いうわよねぇさりげなく

…麻梨ちゃん……

ぼくを寝かせずに恋人をつくれないどころかアルバイトまで失わせるつもりか？

部屋を借りたいのはぼくのほうだ

ぼくはずっと考えていた

麻理ちゃんの両親矢野夫妻の好意にいつまでも甘えてるわけにいかない

独立のためにほかのバイトより割のいいコンビニエンスストアーの深夜のバイトにしたのもそのためだった

いつも帰りがおそいんですね
仕事はなにしてるんですか？
なにもしてない
なにもしないで暮らしてる
よっぽど親が資産家だったんだ
敷地を見りゃ一目瞭然だけど
じゃあ いつもコーヒー飲みにここまで!?
あ…いや
こんなとこにこなくてもあの館でゆったりすわってコーヒー豆をひいて飲むほうが似合ってるというか
似合ってる？
ではきみが家にきてコーヒーをいれてくれ

自分でいれる
コーヒー
カップより
他人がいれた
紙コップが
いいってか

だったら
家政婦をおけよ
金持ちのくせして

こんばんはー

あ
いらっしゃいませ

めずらしいですね
こんな遅い時間に

そうなの
遊んじゃって

友だちの家に寄って
飲んで
騒いじゃってね
泊まってもいいって
いってくれたんだけど

冷蔵庫が
からっぽなの
思い出して

このあいだ
たのんだ
新製品
いれてくれた？

ありますよ
右の棚
右の

あ これよ
これ！

帰ったのか

なあ たのむよ

麻梨さんは あれから 毎日のように 館の男に 会いに行ってる みたいなんだよ

麻梨さんは おれたちと デートしても だれかひとりの 家をたずねる なんてこと なかったんだ

へーえ

これは 問題だぞ

おまえ 行って 麻梨さんのようす 見てきてくれよ

なんで ぼくが

おれたちは つれてって もらえないん だってば!

聞けば おまえは住人に 遊びにきても いいと 許可 もらってるって いうじゃないか

館の話は あれっきり してないから てっきり 毎日 大学の だれかとデート してるんだと 思ったら……

ごかい

保育

信の会いポーズ

それにしても
でかい敷地だな
庭なんて
もんじゃないや
手入れも
してないよ
なんだ
これ?
それは
日時計だよ
あっ
ど…どうも
ベルを押しても
返事がなかったので
門があいてたから
勝手に……
きょうは
曇ってて
役に立たない

いいか 篠内さんは おとなだ

麻梨ちゃんが ぼくの友人たちを あしらうようには あの男は 麻梨ちゃんの 思い通りには いかないんだぞ

麻梨ちゃんが 軽い気持ちでいると

麻梨ちゃんが そんな目に あうのは 見るに しのびないから 忠告してんだよ

なーにが やきもちだよ

篠内さんに やきもち 嫉いて どうすんだよ

え?

篠内さんは わたしなんか 眼中に ないわよ

同じ男の ぼくが いってんだから まちがいないって!

なにが 忠告よ

亮介なんか 恋愛のことは なにも わかってないくせに

いいか
篠内さんは
おとなだ

麻梨ちゃんが
ぼくの友人たちを
あしらうようには
あの男は
麻梨ちゃんの
思い通りには
いかないんだぞ

麻梨ちゃんが
軽い気持ちでいると
泣きをみるからな

麻梨ちゃんが
そんな目に
あうのは
見るに
しのびないから
忠告してんだよ

なーにが
やきもちだよ

篠内さんに
やきもち
嫉いて
どうすんだよ

え?

篠内さんは
わたしなんか
眼中に
ないわよ

同じ男の
ぼくが
いってんだから
まちがいないって!

なにが
忠告よ

亮介なんか
恋愛のことは
なにも
わかってないくせに

じゃあ亮介が帰ったあとだったんだわ
もうやめなよあの館に行くの
やだ亮介嫉いてんの
なにいってんだよ
わたしは亮介の友だちや同じゼミの男の子たちと飲みに行ったりしても特定のひととつきあったりしなかったわ
でも篠内さんの場合はたったひとりだから気になるんでしょ
きゃっはっは亮介がやきもち嫉いてるーっ
ぼくの話聞けったら
あの男麻梨ちゃんに気があるぞ
麻梨ちゃんをなれなれしく呼びすてにしてさ
な〜んだやっぱり嫉いてんじゃないの
ちがうって！

麻梨
夕飯前に
帰ってらっしゃい

ここんとこ
毎日じゃないの
おとうさんが
早く帰宅してたら
怒られるわよ

はーい

トン
トン
トン

あら

眠って
たんじゃ
なかったの

いままで
どこに
行ってたんだ

篠内さんの館

いままで
ずーっと
いたのよ

篠内さんって
やっぱり
おとなね
会話が
知的で上手なの

へーえ じゃあ
どこにかくれて
たんだろうな

ぼくきょう
あの館に
行ったんだぞ

きみは麻梨が好きなのか？
え!?
麻梨が心配できたんだろ？
ちがいます！
麻梨ちゃんに話聞いてぼくも館の中が見たいな～と
みんなに…いえ…あの
ふう～ん
じゃあ麻梨がきみ以外のだれかのものになってもきみはかまわないわけだ
ただいま

きみは これを見て 疑問を もたないか？
日時計を？
日時計があって なぜ 月時計が ないんだろうね
夜だって 時間を刻む 必要はある だろう
夜は寝てて 時間を見る 必要ない からじゃ ないですか？
きみは 起きてる
ぼくもだ
月の光が 影をつくり 時を示す
こんな 美しい時計は ほかにないだろうに
あ… あの
麻梨ちゃんは？
麻梨は きょうは きてないよ
麻梨!?

それにしても
でかい敷地だな
庭なんて
もんじゃないや
手入れも
してないよ
なんだ
これ?
それは
日時計だよ
あっ
ど…どうも
ベルを押しても
返事がなかったので
門があいてたから
勝手に……
きょうは
曇ってて
役に立たない

な…
なんだとーっ

ぼくだって
恋愛したこと
あるぞ
つきあった
ことだって
あるんだ
からなーっ

さっき 一瞬 見せた
麻梨ちゃんの
表情が気になった

かって 一度も
ぼくが見たことのない
表情のように思えた

朝 ぼくが
バイトからもどると
麻梨ちゃんは
もう 大学に
行ったあとだった

大学にいっしょに
行く時間をのがすと
講義が終われば
ぼくは まっすぐ帰る
麻梨ちゃんは
遊びに行く

麻梨ちゃんが帰ってくるころ
ぼくは寝ていて
ぼくがバイトしているあいだ
麻梨ちゃんが寝ているという
すれちがいの生活になる

その朝は
ぼくたちの心まで
すれちがったような
気分だった

カシャ
カシャ
今晩は―
いらっしゃいませ
このあいだシャンプー買うの忘れちゃってやだわ――
木崎くん眠くなったりしないの？
バイト中に？
いまぐらいの時間なら わたし以外にもほかの客がきてるの見たことあるけど
このあいだみたいな時間なら客もほとんどこないでしょ
もうひとりバイトがいれば話し相手になるのにね
お客 いたでしょ
カンナさんが店にきたとき
なにいってンのいなかったわよだれも

だから いってるん じゃないの

ほらほら カウンターで 居眠り してたんじゃ ないの？

してませんよ 居眠り なんか

いつも あのぐらいの 時間に コーヒー飲みに くる お客がいて

あのときも きてたんですよ

カンナさんが きて すぐ 帰ったよう でしたけど

あら そう？

篠内さんは 結婚しないん ですか？

ただ カウンターに いるだけだったら 眠くなるだろうが 実はレジ以外に する仕事がけっこうあって 居眠りなんか していられない

だが やはり どんな時間にも 人がくると ひとりでいるより ホッとするのは 事実だ

これは さぐりだ

麻梨ちゃんに 怒られそうだが この男が 麻梨ちゃんを 好きなら 本気か遊びか 確かめてやる

だれと？
だ…だれとって
知りませんよ
そんなこと！

そういう
女性は
いないんん
ですか？

いない

どうして
そんなことを
聞くんだ？

いや…あの
さみしいんじゃ
ないかなぐなんて

ぼくが？
なぜ　そう
思うんだ？

館を見せて
もらったら
あんまり広くて
ぼくだったら
ひとりじゃ
さみしいと
思うから

ふうぐん
では
きみなら
結婚するのか

そりゃ
いまは
無理だけど
それなりの
年に
なったら

それに
結婚したら
わざわざ
ここまで
コーヒー飲みに
こなくても
奥さんに
コーヒーいれて
もらえるし

では
そうしよう

えっ
でも いま 結婚するような 女の人は いないって
きみが 家に きなさい
下宿 あの館に――っ!?
ぼ…ぼく!?
いや……え… ぼくは婿に
いや その 男は……
コーヒーは インスタント しか いれたこと ないし
なにが なんだか
なにを わけのわからない ことといってるんだ
下宿しないかと いってるんだよ
部屋は いくつでもある 好きな部屋を 使うといい
どうして
きみとぼくは 境遇が似てる
だが きみは 他人の善意 なくしては いまのきみは 存在しない
ぼくの親は たまたま 財産を残して 死んだ

ぼくにとって部屋を貸すことぐらいなんの損にもなりはしない

無料で貸してもかまわないが

それじゃきみが下宿しづらいだろうから格安で貸そう

それにきみはぼくがひとりでさみしいと思ったんだろ!?

なら責任をとるんだね

いやかな下宿するのは

責任というのは冗談だが

いえ!

責任とります責任!!

即決で返事したのは無理もなかった

麻梨ちゃんの家からひとり立ちすることを考えていたぼくにとってこんな好条件はない

それにあの館に住んでいれば麻梨ちゃんが遊びにきても危ないときは守ってやれる

矢野夫妻が
麻梨ちゃん同様
自分の子どものように
育ててくれたことを思うと
きりだしにくい話だったが
おじさん
おばさん
お話が
あるんですけど
以前にも一度
独立の話を
したことがあり
ふたりを
さほど驚かせずに
すんだことが
救いだった
いつかは
亮介くんが
この家を
出ることは
覚悟していたが
それは 大学を
卒業してからでも
遅くはないんじゃないか
なんだ
麻梨は まだ
帰ってこないのか
やさしいふたりが
ひきとめてくれるのは
わかっていたが
今回ばかりは
ぼくの決意は固かった
あなたが
ひとりで
暮らすことに
なっても
わたしたちが
親がわりに
かわらないことは
覚えておいて
もどりたく
なったら
いつでも
帰ってくるのよ

この家を出るんだって？

わっ びっくりした！ ノックぐらいしなよ

わたしがきらいだから？

ば……

なにいってんだよ ぼくは麻梨ちゃん好きだよ おじさんもおばさんも好きだよ

ぼくが独立することとそういうことは関係ないよ

わたしは亮介のこと兄さんだなんて思ったことないわ

亮介が中学生と高校生のときつきあってる女の子がいるって知ってどうしてだまってたかわかる？

亮介の好きな女の子たちに嫉妬してたわ

それでも亮介になにもいわなかったのはほかの女の子じゃなくわたしにしかできないことがあったからよ

それは亮介といっしょに暮らすこと

どんなに亮介がほかの女の子とデートに行っても必ずわたしの家に帰ってくる

わたし以外のほかの女の子は絶対にはいれない家

その優越感だけがわたしをささえていたわ

でも……

でも亮介がこの家を出て行ったらもう…だめ

行かないで恋人つくってもいいからここにいて！

行かないでよ!!
バイトの時間だよ
篠内さんの館をたずねたのは最初の1回だけよ
男の子たちと飲みに行ったりするのも みんな亮介の注意をひきたかったから

おいしい弁当と
安堵感に
ひたりながら
バイトに行く
時間まで
ぼくは
ぐっすり眠った

その夜は

篠内さんは店にこなかった

弁当半分とメモ残してありためら

それ食ったらコーヒー飲みにこないのかな

麻梨ちゃんは元気だ

もう麻梨ちゃんの男友だちや夜遊びを心配することもないだろう

その理由は自分にあるとわかっていてそれにこたえていない自分にうしろめたさを感じながらも

ぼくは安心せずにいられなかった

麻梨が持ってきたのか

そうですきのう

あすみません寝てると思って篠内さん呼ばなかったんです

篠内さんは麻梨ちゃんが好きだったんだまずかったかな会わせずに帰して……

またくるっていってましたから

弁当つくって持ってくるって

なぜ弁当を?

ぼくがロクな食事してないと思ったからじゃないかな

あ…ぼくにってわけじゃなくて篠内さんにもですこんどいっしょに食べましょう

うわ…!やっぱり気を悪くしたかな

きみは麻梨の家にもどりたくなったんじゃないのか？
いえ そんなことないですよ
篠内さんもいままで だれか差し入れとか手料理作りにきてくれた女性がいたでしょう？
手料理……
だれか…
いた……
篠内さん どうしたんですか!?
……
だれだ……？

そうか
きみの気持ちばかり聞いたが
麻梨はきみが好きなのか

だが
きみは麻梨を好きじゃないといったな
そうだろ？

以前は肯定したその質問に
いまはっきり彼の口からそういわれてぼくは同じように答えられなかった
〝好きじゃない〟

篠内さんが
麻梨ちゃんに
好意を
いだいていると
(麻梨ちゃんは
否定したが)
知ったいまは
〝そんなことは
ない〟とは
いえないことも
あったが

かといって
〝好きじゃない〟と
答えることは
もはや 麻梨ちゃんへの
妹に対するような
ぼくの気持ちさえ
消えてなくなるような
気がしたからだ

こんど
麻梨ちゃんが
たずねてくるのを
複雑な思いで
ぼくは待った

そして
篠内さんの
心の内が
どんなふうに
変化していったか
知る由もなかった

忘れもしない
その日は日曜日だった
日曜日という
こともあって
バイトから帰ると
朝食もそこそこに
昼までのつもりで
熟睡していた
ときだった
起きろっ!!

だれだ
おまえは!?
他人の家に
勝手に入って
寝てるとは
どういうつもりだ!!

なに…？

ほら ちゃんと 合鍵だって 借りてるし

これを どこで…

篠内さんに 決まってるでしょ 本人に聞いて ください

篠内さん 篠内さん

ギッ

篠内さん！
篠内さん！

いったい
どうなってるんだ…!!

ちがう!
こんなんじゃ
なかった

ほんとに
篠内さんに
部屋を
借りたんです

彼と会って
話をしたと?

もちろんですよ
ゆうべは
こんな部屋じゃ
なかった

ぼくの
バイト先にだって
コーヒー
飲みにきて……

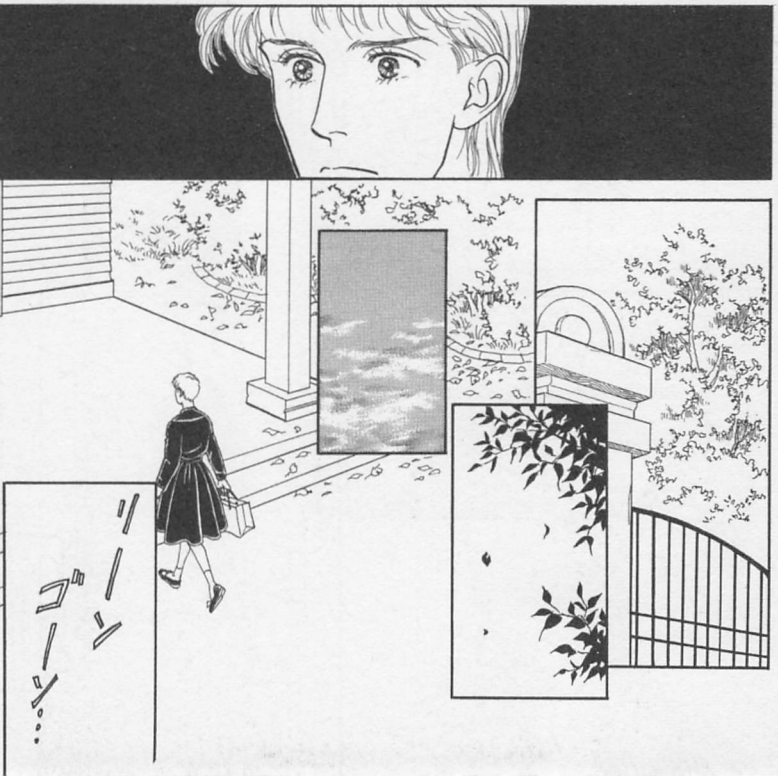
ばかな!
そんなことが
あるわけない

彼が この家に
いるはずないんだ!

ましてや
鍵など……!!

いるはずないって どういうことですか
あなた 篠内さんの 親戚か なにか ですか？
ぼくは この家を管理してる 弁護士だ

きみが 篠内さんに 会ったと いうのなら 本人かどうか 確かめて もらおう
きなさい！


ツーン
ゴーン…

カタカタ
亮……!
……介
こ…こんにちは 亮介いますか?
どうぞ
彼は外出してるようだよ
え
すぐ帰ってくるだろうから待ってるといい

あの人です！
まちがいありません
でもどうして!?
きみは1か月前から彼と会ってるといったね
だが 篠内さんは2か月前からこの病院にいるんだよ

篠内さん寝てると思ってたわ

ぼくがいたら邪魔かい？

いえそんなこと

亮介が篠内さんは日中は寝てるっていってたし

このあいだわたしがきたときも眠ってらしたみたいだから

弁当を持ってきたんだって？

きょうも持ってきたんだろう？

食べものでつるつもりか

亮がひどいこといってたでしょうまずい弁当つくってくるにきまってるとかなんとか

え？

亮介をつれもどしたいんだろう

麻梨がくると亮介は帰ってしまう

この館を出て行ってしまう

篠内さ……
彼は2年前に婚約者を殺したんだ
おまえはきちゃいけないんだ
ここには二度と……
二度と…
ハッサッ

ガタン!
やめろっ
あんたは殺せやしない
あんたはいないんだ!!

麻梨ちゃん!!
麻梨ちゃん
亮介……

なぜ婚約者を殺したのかわからないのだ

取り調べ中ようすがおかしいので精神鑑定を受けさせられた

婚約者を殺したショックによってそうなったのか

あるいは……

医者は彼の精神の破壊は進行していくといった

そしていまは事件のことも自分が何者かさえわからないのだ

閉ざされたはずの精神は

肉体を離れ

館の中を…庭を徘徊し

そして長い夜の孤独のあまり深夜のコンビニエンスストアーにきたのだろうか

なぜ ぼくと
麻梨ちゃんにだけ
彼の姿が見えたのか

だれも
いなかったわよ

麻梨ちゃんを
殺してまで
ぼくを
この館に
とどめようと
したなんて

なぜ
麻梨ちゃんじゃなく
ぼくでなきゃ
いけなかったのか

境遇が似ている
から――？

亮介
大学行くわよ

あのときの――

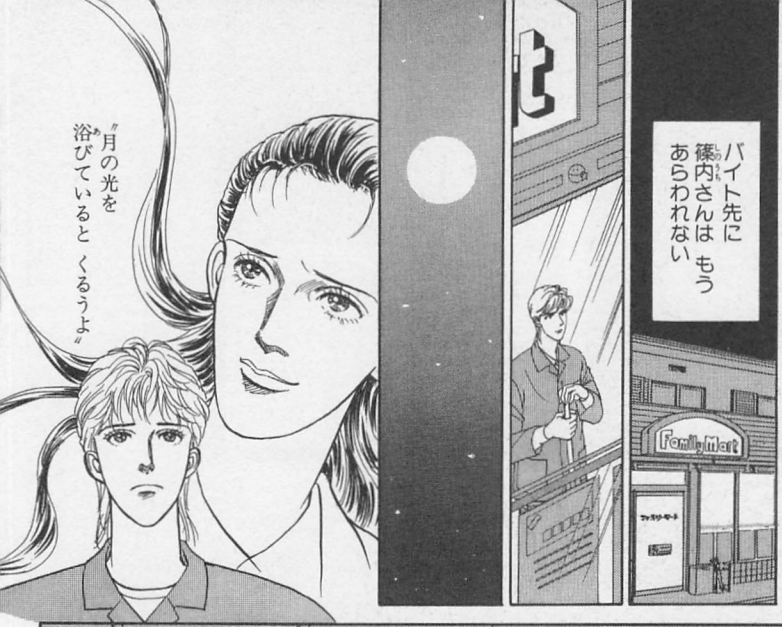
ぼくは
とりあえず
麻梨ちゃんの
家にもどった

いってきまーふ

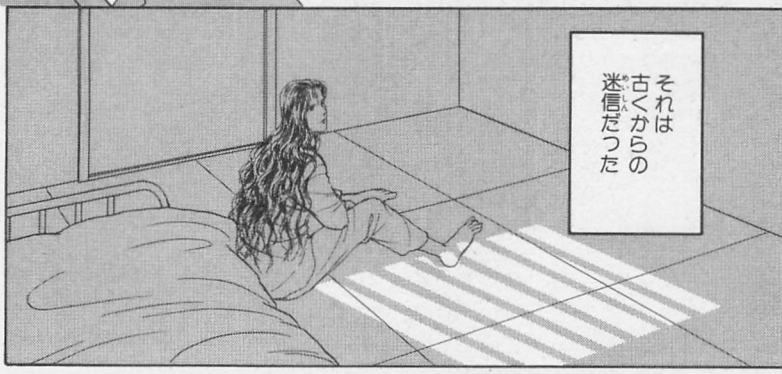
麻梨ちゃんの
生死を考えると
いまでも
震えがくる

それは
もはや妹への
それ以上の
感情なのだと
思い知らされた

バイト先に
篠内さんは もう
あらわれない



それは
古くからの
迷信だった



彼は いまでも
病室で
夜中に
起きているという

彼の月時計は
月の光を浴びて
しだいに狂った時間を
刻みつづけていったに
ちがいない

《おわり》